



2学期を振り返って

校長 富川 麗子

2学期の終業式を迎えました。今年5月8日には、新型コロナウイルス感染症が「2類相当」から季節性インフルエンザなどと同じ「5類」に移行しました。約3年に渡った法に基づく様々な制限が緩和され、行事もほぼ、コロナ前に戻ってきました。2学期は、行事も多く生徒の皆さんも先生方も本当に忙しい学期だったと思います。式は、日常生活に区切りをつけ、これまでを振り返り、点検する節目の機会と、冬休みをどう過ごし、3学期、どのような学校生活を送るかを考える日でもあります。

さて、来年夏、パリ・オリンピックが開催されることは、スポーツファンにとって大変楽しみなことです。今は冬で、ウィンタースポーツが盛んに行われています。冬季オリンピックの選手の中で、私にとって印象深い選手の一人として、女子スキー・モーグルで冬季五輪5大会出場した上村愛子選手がいます。

上村選手は、中学3年生でナショナルチーム入りし、日本人として初となるワールドカップ女子モーグル総合優勝を果たすなど素晴らしい結果を出しています。

1998年 長野大会 7位 2002年 ソルトレークシティ 6位 2006年 トリノ 5位
2010年 バンクーバー 4位 2014年 ソチ 4位

バンクーバー五輪の時の「なんでこんなに一段一段なんだろう……」という言葉に実感が込められていました。バンクーバー五輪の後、約1年間の休養をとった上村選手は、「選手として人として、自分は何をすべきなのか。」等、様々なことを考えたそうです。その結果、挑戦せずに後悔だけはしたくない。自分は何度も闘える。と自分自身を奮い立たせ、トレーニング、栄養管理などできることは何でも取り入れて、1年間のブランクで落ちた筋力を取り戻すところからソチ五輪に向けて再スタートしたそうです。

ソチでもメダル獲得にはならなかったものの、競技が終わった時、「後悔はなかった。なぜなら、メダルを目指すために必要なこと、最善のことは全てやり切った」からだと言っています。

モーグルはコブを一つひとつ越えながら滑り降りていくスポーツで、コブという目標が目前にあり、昨日越えられなかったコブを今日越えることができた。明日はもっと上手に跳べるようになるはずだ。と、一つひとつ着実に進歩している自分を実感することができるスポーツであると上村選手は話しています。また、上村選手は、「練習日記」をつけ、コブをジャンプする時やエアーの姿勢を絵に描いて、どこができて、どこができないかを自分で毎日分析し、体の感覚だけではなく、頭でも理解することに務めたそうです。自分の頭で考える習慣が何よりも大切であると言っています。

来年のパリ・オリンピックでは、様々なパフォーマンスが見られることでしょう。しかし、上村愛子選手のような選手の存在は、私たちにとっての大きな目標となります。成功やメダルにこだわるだけでなく、挫折や失敗を乗り越える力、そして努力を惜しまない姿勢が、本当の意味での勝利をもたらすのです。

皆さんは、この2学期もたくさんの学びや経験を積んできました。しかし、学びは終わりません。将来に向けてもっと成長し、自分自身を高めるためには、常に新しいことに挑戦し続けることが必要です。皆さんには夢や目標を持ち続けてほしいと思います。自分の夢に向かって努力し、挑戦し続けることで、素晴らしい未来を築くことができます。明日から冬休みです。皆さんそれぞれに、授業の復習や課題等、やらなければならないことが目の前にあると思います。しかし、新しい年を迎えるこの機会に少しだけ立ち止まって、自分は何を目指すのか、ということを考えてほしいと思います。それでは、新年、始業式は1月9日です。また元気な顔でお会いしましょう。良い年をお迎えください。

